

# 非キリスト教化運動と最高存在の祭典

——ロベスピエールの宗教政策——

上 田 和 彦

1793年8月4日、新憲法が国民投票によって圧倒的多数で承認され、10日には公布されたものの、なかなか施行されなかった。対外戦争に加え、ヴァンデ地方の叛乱、国民公会からの追放後地方に散ったジロンド派の蜂起、食糧問題などに国民公会が対処しなければならなかったこの時期、議会を解散して選挙を行うと混乱を招き、新憲法が悪用されるおそれがあると危惧されたからだ。8月28日、国民公会にて非常事態宣言がなされ、9月5日にはサン＝キョロットの圧力の下、公安委員会が主導する「恐怖政治」が始まる。10月10日、国民公会ではサン＝ジュストによる公安委員会の報告があり、「フランス臨時政府は平和が到来するまで革命的である」、また「臨時執行委員会、閣僚、将軍、行政・司法の諸機関は公安委員会の監視下に置かれる」と布告され<sup>1)</sup>、公安委員会の言わば独裁が国民公会で事実上認められた。

ちょうどこの日、国民公会の地方派遣議員ジョゼフ・フーシェが、フランス中部のヌヴェールで「墓地令」を布告している。第一条で「もろもろの宗教のあらゆる信仰行為は、それぞれの聖堂においてしか執り行えないものとする」とし、埋葬を市町村自治体の役人の管理下におくこの「墓地令」は、臨終の秘蹟を授けるといふ、キリスト教聖職者が市民の日常生活でこれまで担ってきた公共的役割を剥奪する法

1) *Archives parlementaires*, t. 76, p. 31. 以下この資料から引用するさいは AP の略号を用い、続けて巻数と頁数を記す。

令である<sup>2)</sup>。10月16日、フーシェとともにヌヴェールに赴いていたパリのコミュニケーションの検事ガスパール・ショーメットはこの「墓地令」をパリのコミュニケーションに報告し、原則としてパリでも採用させる<sup>3)</sup>。

10月の末から11月の初めにかけて、国民公会においても、共和国をカトリシズムから切り離す提案が相次いでなされる。10月24日、国民公会では、公教育委員会のファールブル・デグランティエヌが、グレゴリウス暦に代わる共和暦について報告し、共和暦の採用に関する法令が成立する（11月24日に正式の暦が発布）<sup>4)</sup>。10月28日、国民公会は公教育委員会の提案を受け、いかなる聖職者も教諭として任命されないと布告する<sup>5)</sup>。11月5日、国民公会では、公教育委員会のマリ＝ジョゼフ・シェニエが、公教育のために市民の祭典を創設しカトリックの代わりに祖国の宗教を生み出すことを提案する<sup>6)</sup>。11月6日、国民公会は諸コミュニケーションに小教区を廃止する権利を認める<sup>7)</sup>。

そして11月7日には、パリ大司教ゴベルが国民公会にて大司教職を放棄し、公会の聖職者議員たちが多数これにならって聖職を放棄するという大事件が起こる<sup>8)</sup>。

---

2) François Alphonse Aulard, *Le culte de la raison et le culte de l'Être suprême (1793-1794), Essai historique*, Félix Alcan, 1892, p. 27-29. 以下この文献から引用するさいは ACR の略号を用いる。

3) ACR, p. 30.

4) AP, t. 77, p. 496-507.

5) AP, t. 77, p. 711.

6) AP, t. 78, p. 373-376.

7) AP, t. 78, p. 466.

8) AP, t. 78, p. 550-556. ゴベルは、アナカルシス・クローツとパリの民衆協会の元締たち、ショーメットに説得され、司教職を放棄するように強いられた。この件に関しては同時代人のグレゴワールの証言を参照されたい。Grégoire, *Histoire des sectes religieuses, nouvelle édition corrigée et considérablement augmentée*, tome premier, Baudouin frères, 1928, p. 70-77.

## 理性の祭典

このように非キリスト教化運動が広まるなか、共和暦2年霧月20日（1793年11月10日）、パリのノートル・ダム大聖堂で「理性の祭典」が行われた。当時の新聞は次のように報告している。

パリの旧首都大司教座聖堂に沢山の人々が赴いた。そこには簡素だが荘厳な造りの聖堂が建てられており、そのファサードには、哲学にとりていう文言を読むことができた。この聖堂の入口は、現今の革命の到来に彼らの光明によって最も貢献した哲学者たちの胸像で飾られていた。聖なる聖堂は山の頂に建てられていた。中央あたりの岩のうへには真理の篝火が輝いているのを見ることができた。憲法上の諸機関〔県とコミューン〕が揃ってこの神聖な場に赴いていた。武力はひとつもその場にはなかつた、総指揮官が日令で、そのことに関して指摘していた者たちに、次のように通知した。武器が似つかわしいのは闘いのなかだけだ。兄弟たちが集い、あらゆる時代遅れの偏見からやっと身を清め、満足した魂の喜びのうちに平等の魅力を味わおうとするところには似つかわしくない。

この儀式にはギリシアやラテン風の儀式に似たところは全くなかつた。それゆゑこの儀式は魂に直に達していた。楽器が教会のセルパンのように轟くことは断じてなかつた。共和主義者の楽隊が山の麓に陣取り、頌歌を日常語で演奏していた。それは神秘的で現実とかけ離れた賛辞ではなく、自然の真理を表現しているだけに、人民たちはそれだけいっそう聞き取ることができた。この荘厳な楽曲の間に、白装束でナラの葉で編まれた冠をいただいた少女たちが二列で山を下りて横切り、篝火を手にして再び山の上に同じ方向で登っていくのが見えた。その時、自由がひとりの美しい女性によって表現されて、聖堂から、哲学から出てきて、葉叢の椅子のうゑで男女の共和主義者たちから賛辞を受け取りにやってくる。彼ら、彼女らは自由の名譽を頌歌にして、自由に両手

を伸ばしながら歌っていた。自由は次いで下に降りて聖堂のなかに帰っていきうとすると、中に入る前に立ち止まり、振り返ってもういちど寛大な眼差しを友たちに向けようとする。彼女が中に帰るやいなや、歓喜の歌と、彼女に忠実であることを決して止めないという誓いでもってその場の感激が極まった。<sup>9)</sup>

一同はその後国民公会に赴き、パリのコミュニューンの検事ショーメットが議員たちに向かって、いましがた旧首都大司教座聖堂にて人民が理性に捧げ物をしたことを報告し、法の聖所でもうひとつの捧げ物をするためにやってきたので許可してほしいと申し出る。許可されると、若者たちの楽隊を先頭に行進が始まり、孤児たちが愛国頌歌を合唱しながら続き、赤いフリジア帽をかぶった市民たちが「共和国万歳！モンターニュ派万歳」と繰り返し叫びながら進んで来ると、国民公会の議員たちの一部が声を混ぜ合わせる。楽隊が革命讃歌の楽曲を鳴り響かせると、白装束に三色のリボンを身に付け、ナラの葉で編まれた冠をいただいた少女たちが続いて、理性を表現したひとりの女性が現れる。「共和国万歳！」の叫びが繰り返され、フリジア帽と帽子が宙を舞う。<sup>10)</sup>

理性の女神が議長の前に赴くと、ショーメットが演説を始める。

立法者の市民たちよ、諸君がご覧になったように、狂信は手放した。それまで占めていた場所を理性、正義、真理に譲った。そのやぶにらみの眼は光の輝きに耐えることができなかった。狂信は逃げ去った。狂信が我々に譲り渡した諸聖堂を我々は占拠した。我々はそれらを再生させた。

今日、パリの人民がこぞって、偽りの声でかくも長い間打ちたたかれたゴシックの天蓋の下に赴いた。その天蓋は初めて自由の叫びに満たされた。そこで我々は自由、平等、自然に捧げ物をした。そこで我々は「モンターニュ派万歳！」と叫んだ。そしてモンターニュ派は我々の叫びを聞いた。というのもモンター

9) *Révolutions de Paris, dédiées à la Nation*, no. 215, tome17, le 13 novembre 1793, p. 214-215.

10) AP, t. 78, p. 710-711.

ニュ派は理性の聖堂で我々に合流しにやって来ていたからだ。我々は断じて我々の捧げ物を無駄な像、生きていない偶像に捧げはしなかった。違うのだ。我々が自然を表現するのに選んだのは自然の一傑作であり、この聖なる像はすべての心に火をともした。唯一の誓い、唯一の叫びがあちこちから聞かれた。人民はこう言った。「もはや司祭はいない、自然が我々に与えるもの以外の神々はいない」。

我々は彼らの公吏としてこの誓いを受け取り、理性の聖堂から諸君のもとにもたらず。我々が理性の聖堂から法の聖堂に来ているのは、もう一度自由を祝うためだ。我々は諸君に、パリの旧首都大司教座聖堂が理性と自由とに捧げられることを求める。狂信はその場を放棄した。理性を持つ存在たちがそこを占拠した。彼らの所有物を公認して下さい。<sup>11)</sup>

ショーメットの演説が拍手喝采されると、議長が「議会はこのうえなく満足して、理性が今日迷信と狂信に対して勝ち取った勝利を目にしている」と応え、議員の一人（シャボ<sup>12)</sup>）が、ノートル・ダム首都大司教座聖堂が今後理性の聖堂になるように求めたパリ市民の要求を動議に変えると、提案が採択される。次いでもう一人の議員が理性の女神が議長の横に座ることを求めると、ショーメットが彼女を議長席まで連れていき、「議長と秘書たちは彼女に友愛の接吻を拍手喝采されながら送る」。その後もう一人の議員（チュリオ<sup>13)</sup>）が国民公会が理性の聖堂となったノートル・ダム大聖堂に赴き、人民と一体となって「自由の讃歌」を歌いながら行進することを求めると、提案は受け入れられ、国民公会の議員たちも加わったかたちで儀式がノートル・ダム大聖堂で再開された。<sup>14)</sup>

そこでは、国民公会議員のマリ＝ジョゼフ・シェニエ作詞、ゴセック作曲の『自

---

11) AP, t. 78, p. 712.

12) François Chabot (1756-1794).

13) Jacques Alexis Thuriot (1753-1829).

14) この段落の記述は、AP, t. 78, p. 711 による。

由の讃歌』が合唱された。

降りて来なさい、おお自由、自然の娘よ、／人民は自らの不滅の力を再び手にした。／古の欺瞞の荘重な残骸の上に／人民の手で君の祭壇が建てられる。

来なさい、王たちに打ち勝った者たちよ、ヨーロッパがあなたたちにみとれる。／来なさい、偽りの神々の上にあなたたちの成功を広げなさい。／聖なる自由、汝はこの神殿に住まいに来なさい。／フランス人たちの女神であれ。

汝の容貌はこのうえなく荒涼とした山を陽気にする。／岩のあいだに苔が生える。／汝の手で美しくなって、このうえなくおぞましい岸辺が／氷塊に囲まれて笑う。

汝は楽しみと、徳と才能を二倍にする。／人間は汝の聖なる旗のもとでつねに勝者である／汝を知る前には人間は生を知らない。／人間は汝の眼差しによって創造される。

主権者たる人民に王たちはみな戦争をしかける。／汝の足下に、おお女神よ、王たちは今後崩れ落ちる。／まもなく地上の暴君どもの棺のうえに／人民たちは平和を誓いに行く。

自由をもたらす戦士たち、強力で勇敢な種族よ、／人間らしい剣でもって武装し恐怖を聖別しなさい。／あなたたちの打撃でもって撃滅されて、最後の奴隷は／墓まで最後の王についてゆけ。<sup>15)</sup>

自由をフランス人民の女神として言祝ぐ祭典が行われるのは、自由を求めて進行

---

15) AP, t. 78, p. 711.

してきた革命期に似つかわしいように見える。フランス全土のカトリック「総本山」とも言えるノートル・ダム首都大司教座聖堂でこれまで行われてきたことを「狂信」の一言で切り捨て、いまや「理性」を備えた存在たる人民が自由を祝うために聖堂を占拠したこの理性の祭典は、人民とキリスト教会との対立、理性と信仰との対立がひどく単純化されているにしても、歴史を遠くから眺める者にとっては、フランス人民の知的開放の手段だったとしてむしろ評価されてもおかしくない。

11月10日に行われた理性の祭典は、去る10月から目立ってきた非キリスト教化運動に拍車をかけることになる。翌る11月11日、パリの諸セクションと諸民衆協会の代表団が国民公会に赴き、司祭への給与廃止を求める（国民公会は申し出を優の評価とともに報告書に記載するだけに留める）<sup>16)</sup>。11月15日、国民公会は、カトリックの礼拝を放棄したコミューンの司教館を救貧と公教育に当てることに決める<sup>17)</sup>。11月20日には、パリのリュニテ区の代表団が聖職者風に仮装して国民公会を訪れ、カトリックの礼拝のパロディを演じたうえで、理性、自由、平等、共和国以外に崇拜しないと誓い、共和国万歳の声を公会に響かせる<sup>18)</sup>。11月23日、ショームットが理性の聖堂以外のパリのあらゆる教会と聖堂の閉鎖をパリのコミューン評議会に布告させる<sup>19)</sup>。

パリでのこうした非キリスト教化運動は、フランス全土に広がり、いたるところで教会が理性の聖堂に転用され、鐘楼からは鐘が下ろされ、教会内の金銀の聖遺物箱や装飾が国民公会に寄贈されるようになる。司祭職の放棄が相次ぎ、聖職者民事基本法以来、憲法に宣誓して革命の展開に歩調を合わせようとしてきた「立憲司祭」も、「宣誓拒否司祭」といっしょくたにされて批判されるようになり、立憲派カトリシズムの没落が決定的になる。<sup>20)</sup>

16) AP, t. 79, p. 21-22.

17) AP, t. 79, p. 278.

18) AP, t. 79, p. 548. CF, ACR, p. 62.

19) *Réimpression de l'ancien Moniteur* [以下 *Le Moniteur* と略], Plon 1858-1863, vol. XVIII, p. 506.

20) 各地での非キリスト教化運動については、前掲の ACR, p. 97-19 に詳しい。またこの運動の地

## 非キリスト教化運動とロベスピエール

そのような情勢のなか、11月21日、ロベスピエールはジャコバン協会で演説し、非キリスト教化運動に歯止めをかけようとする。

国民公会が、愛国的な寄付を受け入れることによって、カトリックの崇拜を禁じた人々は思った。違うのだ、公会は断じてそのような無謀なやり方をしなかった。公会はこれからも決してそのようなことはしない。公会の意図とは、公会が宣言した崇拜の自由を維持すると同時に、それを濫用して公共の秩序を乱そうとする者たちすべてを抑えることである。公会は温和な聖職者たちを人々が迫害することを許さないし、聖職者たちが大胆にも自分の職務を利用して市民たちを騙し、偏見や、共和国に反対する王党主義に武装させようとするならば、そのたびごとに彼らを厳しく処罰しよう。人々は、司祭たちがミサを行った廉で告発した。人々がミサを行うことを妨げれば、彼らはもっと長い間ミサを行うことになろう。司祭たちを妨げようと欲する者は、ミサを行う者よりももっと狂信的である。

もっと先まで行こうと欲する人たちがいる。迷信を破壊するという口実の下に、無神論そのものを一種の宗教にしようとする者たちだ。どんな哲学者も、どんな個人もその点に関して自分の気に入る意見を採ることはできる。そうしたことでその者を激しく責め立てようとする者は誰でも無分別である。しかし公的な人間、立法者がそのような体系を採用するならば、百倍無分別だ。公会はそんな体系を忌み嫌う。公会は乱作家、形而上学的な体系の作者では断じてない。それは政治的な民衆に依拠した団体であり、諸権利だけでなく、フランス人民の気骨を尊重させる任務を負っている。公会が、最高存在の面前で人間の諸権利の宣言を布告したのは断じて無駄ではない。

---

政学的な分布を分析したヴォヴェルの研究も参照した (Michel Vovelle, *La Révolution contre l'église. De la raison à l'Être suprême*, éditions complexe, Bruxelles, 1988)。



おそらく、私は狭隘な精神の持ち主、偏見に満ちた人間、狂信者などと言われるだろう。さきに言ったことだが、私は一個人としてではなく、体系的な哲学者としてでもなく、人民の代表者として話していた。無神論は貴族主義的である。虐げられた無辜には気を配り、勝ち誇る罪は罰する偉大な存在という観念は、まるごと民衆に普及している。人民、不幸な者たちは私に拍手喝采する。咎め立てる者を私が見出すとすれば、金持ちや罪人のなかにであろう。私はコレージュの時からかなり悪いカトリックだった。私は人類にたいして冷酷な友であったことも、不実な擁護者であったことも決してなかった。私はいましがた諸君に説明した道徳的かつ政治的な考え方によりいっそう執着するだけである。もし神が存在しないのなら、それを発明しなければならないだろう。<sup>21)</sup>

なぜロベスピエールは非キリスト教化運動に歯止めをかけようとしたのか。国民公会はカトリックを禁止しようとしたこともないし、今後も断じて禁止することはないとロベスピエールは言う。そして、非キリスト教化運動のなかには無神論を「一種の宗教」にしようともくろむ者たちがいるが、立法者が無神論を採用するならば無分別だと説き、国民公会は無神論を忌み嫌うと言う。ここでロベスピエールが、国民公会を代表するかのような立法者として発言していることに注目しておこう。コレージュ時代の自らの個人的な宗教的態度と対照させながら彼が立法者として説くのは、「もし神が存在しないのなら、それを発明しなければならないだろう<sup>22)</sup>」というヴォルテールの考え方だ。この考え方を彼が採りあげるのは、理神論的な哲学体系に依拠してではなく、「虐げられた無辜には気を配り、勝ち誇る罪は罰する偉大な存在という観念は、まるごと民衆に普及している」と、フランス人民の現状について立法者として診断するからだ。ロベスピエールは次のように説明する。

21) *Œuvres complètes de Maximilien Robespierre*, Tome X, Société des études robespierristes, 2011, p. 196-197. 以下この全集をOCRと略す。

22) Voltaire, *l'Épître à l'auteur du nouveau livre : Des Trois imposteurs (1769)* in *Œuvres complètes de Voltaire*, Garnier, 52 vol, 1877-1885, t. X, p. 403.

フランスの人民は、司祭にも、迷信にも、宗教儀式にも愛着を抱いていない。崇拜そのもの、言い換えるならば、罪にとっては恐怖となり徳にとっては支えとなる理解することのできぬ力という観念にだけ愛着を抱いている。<sup>23)</sup>

フランスの人民は、彼が見たところ、キリスト教会の教義や儀式から離れつつある者が多くいる。しかしながら、善悪を裁く神という宗教感情だけはいまだに維持している。そうである以上、無神論は貴族主義的、すなわち一部の者たちの特殊な考え方であると言うのである。そして、大半の人民がいまだに抱いている宗教感情が人民の道徳と社会秩序の基盤になっている限り、その宗教感情を傷つけるような無神論を広めるべきではないと説く。

もし哲学者が彼が説く道徳性を他の基盤に結びつけることができるにしても、我々はそれでもこの聖なる本能、諸人民のこの普遍的な感情を傷つけないように気をつけよう。社会秩序とすべての私的な美德を保護するこの偉大な観念を自らの発明品によって一瞬でも取って代えることのできる天才とはいかなるものか。<sup>24)</sup>

ロベスピエールが立法者として無神論を是認しないのは、理解することのできぬ力、すなわち人間の理性によっては捉えることができないなんらかの存在が善悪を裁くという観念、つまり最終的に裁く神が存在するという観念を人民が「普遍的」に抱いており、この観念が人民の道徳の基盤になっていると見なすからである。

### 「偏見」への衝突を危惧するロベスピエール

ロベスピエールが、フランス人民に支配的であると彼が見なす宗教的感情を引き

---

23) OCR, t. X, p. 197.

24) OCR, t. X, p. 197.

合いに出しながら、宗教に対する政策に慎重さを求めるのは、理性の祭典後の演説が初めてではない。

立法議会期の1791年11月29日、ジャコバン協会にて、パリソ<sup>25)</sup>が自分の書いた反教権的パンフレットを朗読しながら、司祭の教理問答に道徳の教理問答を代え、司祭の祭典に市民の祭典を対置し、告解制度を廃止するように立法議会に要請する演説をしたさい、ロベスピエールが遮って次のように発言している<sup>26)</sup>。

憲法制定議会が我々に定めた境界線から、我々は逸脱すべきではない。それゆえ、協会はこの著作の内容を危険を伴うことなく聞くことはできないと私は思う。人民が崇めている宗教上の偏見に真っ向から衝突してはならない。時とともにこの人民が成熟し、それと分からぬように偏見を超えたところに置かれる必要がある。<sup>27)</sup>

この頃から既にロベスピエールはキリスト教に「宗教上の偏見」があると認めたうえで、それに「真っ向から衝突してはならない」と述べ、人民の「成熟」を待つべきだと主張している。

1792年3月26日には、摂理という言葉を使ったことで攻撃されたロベスピエールは次のように弁論している。

告白するが、人民の上に立っていた者たちはすべてこの利点のために神性についてのあらゆる観念を自発的に棄てたであろうが、人民と人民に結びついた諸協会に神性の観念を与えることは、人民を侮辱することになるのか。この観念は、私の意見では、我々にかくも首尾よく役立っている。<sup>28)</sup>

---

25) Charles Palissot (1730-1814).

26) MOC, p. 108-109.

27) OCR, t. VIII, p. 26.

28) OCR, t. VIII, p. 235.

ここでも「人民の上に立っていた者たち」と「人民」が対置され、前者が無神論者になろうとも、後者にとって神の「摂理」という観念は「役立っている」と主張している。

1792年11月にも、礼拝に当てられていた基金を廃止する案を財務委員会が告知したい、ロベスピエールは国民公会に送った見解のなかで、人民の宗教感情と道徳意識について次の様に詳細に説明している。

神性の教説は諸々の精神のなかに刻まれており、この教説を人民は自分たちがこれまで公言してきた崇拜に結びつけている。そしてこの崇拜に、人民は自分たちの道徳的観念の体系を少なくとも部分的に結びつけている。この崇拜を直接攻撃すると、人民の道徳性に危害を与えることになる。哲学者たちの社会がその道徳を別の基盤のうえに据えろとしよう。そう思い描くことはできるが、哲学者たちの深遠な省察には無縁で、道徳の動機と宗教の原則を混同することを学んでいた人たちは、政府によって崇拜が別の種類の利害のために犠牲にされるのを見て恐れずにはいられない。[……]公共道徳の聖なる基盤が、法律、習俗、公共の光明に取ってかわられる時を待ちなさい。それまでは、迷信のなかで最も危険な部分が消え去り、祖国からいまだに俸給を支払われている司祭たちの宗教が、我々の政治的原則と似た道徳を少なくとも呈示していると思って自らを慰めなさい。たとえ人権宣言が暴政によって引き裂かれることがあるとしても、我々はそれを、聖職者の専制によって我々が畏怖するように仕向けられてきた宗教典のなかに見出すだろう。社会全体の費用でもって、市民たちがなおも公共の聖堂のなかに最高存在という威厳のある観念の前で集わなければならないにしても、そこでは少なくともこの観念の前では、富める者も貧しき者も、力のある者も弱き者も現実に平等であり、見分けがつかなくなる。<sup>29)</sup>

ロベスピエールの考え方は変わっていない。彼は人民の道徳的基盤が失われるこ

29) OCR, t. V, 117-118.

とをつねに危惧している。カトリックがこれまで培ってきた宗教的感情に人民の道徳性がいまのところ結びついている以上、この「公共道徳の聖なる基盤が、法律、習俗、公共の光明に取ってかわられる時」を立法者は待つべきである、と彼は一貫して主張している。ただ、ここで注目しておきたいのは、「法律、習俗、公共の光明」が道徳の基盤として宗教的感情に取ってかわる時が到来することをロベスピエールが少なくとも想定はしていることだ。問題は、人民が宗教的感情を一切排したかたちで、道徳を基礎づけることができる時が到来するかだ。

## 非キリスト教化運動と国民公会

では、立法者の集まりとしての議会は、ロベスピエールと同じ考え方を共有していたのか。たしかに国民公会は、ロベスピエールが言うように、キリスト教を禁止したことはなかった。しかしながら、先に触れたように、1793年の10月から11月にかけて国民公会では、共和国からキリスト教の影響を取り除こうとする提案が相次いでなされている。しかも、国家と教会の分離、共和国の脱宗教化の動きは、国民公会期に始まったわけではない。

議会（憲法制定国民議会）は当初、聖職者民事基本法（1790年7月12日）によってキリスト教会を国家の監視と管理下に置こうとした。しかし、多くの司教と司祭が基本法への宣誓を拒否することになり、ローマ教皇ピウス6世が基本法を公に否認し宣誓者への異端宣告を示唆したため、議会は厄介な宗教問題を抱え込むことになる。基本法への宣誓を拒否した「宣誓拒否司祭」たちが、基本法で定められた選挙によって選出された「立憲司祭」と対立するだけでなく、「立憲司祭」を拒否して逆に「宣誓拒否司祭」を支持する信者たちが特に地方で現れ、宗教的混乱が民衆を巻き込んで深まっていく。新たに選出された議員たちからなる立法議会では、宣誓拒否司祭に対して基本法の厳格な適用を求める者と、人権宣言に記された信教の自由を尊重する立場から宣誓拒否司祭にも礼拝の自由を認めようとする者が対立したため、基本法によってキリスト教会を国家の管理下に置くという当初の目的が

達成されないばかりか、逆に今度は教会と国家を分離しようとする考え方が出始める。キリスト教会がそれまで担ってきた世俗的な役割（住民台帳、教育、慈善活動）を国家に移管し、司祭から公共的性格を剥奪すべきと主張する論者が現れてくる<sup>30)</sup>。立法議会が推奨した愛国的な「教理問答」が次々に現れ、カトリックの教理問答の代わりに市民の知的教育に使用する動きも広まる<sup>31)</sup>。カトリックの礼拝の代わりに、理性と法の礼拝という一種の市民礼拝の計画を立ち上げる者も出てくる<sup>32)</sup>。結局、立法議会は1792年9月20日、離婚を法制化するとともに戸籍簿を世俗化する政令を布告することになる。立法議会末期のこの法令により、ジャン・ジョレスの指摘を受けてマチエが言うように、「教会と国家の分離は、これまで大抵はその時々理由のために先送りにされてきたのだが、今回は細かな点まで行われ、祖国と宗教の間の溝はさらに深まった<sup>33)</sup>」と考えられる。要するに議会は、カトリックの崇拜を禁止しようとしたことはなかったが、国民公会が立ち上がる前にはすでに国家と教会の分離を事実上進めてきたのである。

国家の脱宗教化が進行しているなかで起こった非キリスト教化運動にどのように対応すべきか。国民公会は一貫した方針を定められないでいた。理性の祭典の翌日の11月11日、国民公会は聖職放棄の報告と旧教会の金銀細工の愛国的寄贈を快く迎える一方で、司祭への俸給廃止の請願には、先に触れたように、優の評価とともに報告書に記載するだけに留めることになるのだが、陳情団に対してシャボ<sup>34)</sup>は次のように応えている。

すべての革命的な措置においてつねに諸県に先んじていたパリのコミュニケーション

---

30) Albert Mathiez, *Les origines des cultes révolutionnaires (1789-1792)*, Société nouvelle de librairie et d'édition, 1904, p. 92-93. 以下この資料から引用するさいはMOCの略号を用いる。

31) MOC, p. 101-104.

32) MOC, p. 104-105.

33) MOC, p. 136.

34) 理性の祭典をショーメットが国民公会に報告しに来た際、ノートル・ダム聖堂を理性の聖堂にするように提案した議員。

が、諸県にたいしてもう一度この美しい範例を与えるのは相応しかった。諸県  
の大半がこの仕組みを採用する準備が整っている、と私は難なく言えよう。し  
かし立法者は何事も早めてはならない。共和国のすべてのセクションが誓願を  
出した時にこそ、我々ははっきりと意見を述べることができよう。

理性と法への崇拜があらゆる迷信に取ってかわる時である。しかし公共精神  
を養成しなければならない。そうする手段とは、この請願書をこのうえなく優  
れたものと評価を付けたうえで記録に挿入し、財務、公教育委員会に送付する  
ことだ。それらの委員会には、この請願書に続くすべての請願書が送付される  
べきある。<sup>35)</sup>

シャボは、パリのコミュニオンを、革命を牽引する前衛と評価したうえで、「公共  
精神」がパリの前衛の考え方に追いつくまで、最終的な決定は引き延ばすことを立  
法者として提案している。立法者としてロベスピエールと同じように慎重な姿勢を  
見せてはいるが、フランスの全県がパリの動きに賛同することになると期待してい  
る。シャボの提案の直後、チュリオ<sup>36)</sup>が支持を表明したうえで、この件について世  
論が十分に明確になる時を待ちながら、当面は聖職を放棄する司祭たちに救済金を  
付与する法令案を作ることを提案すると、二人の提案がともに国民公会で受け入れ  
られる<sup>37)</sup>。この日の討議と公会の決定は注目に値する。司祭への俸給廃止は、国家  
と教会との分離が決定的になる事案である。シャボという人物が「かなり前から誠  
実な愛国者たちには疑われていた<sup>38)</sup>」としても、議員の大半は「理性と法への崇拜  
があらゆる迷信に取ってかわる時である」という見方自体には異論がなかったら  
う。そうした時の到来を助ける契機をパリの非キリスト教化運動に見ようとした者

35) AP, t. 79, p. 22 (le 11 novembre 1793).

36) 理性の祭典をショームットが国民公会に報告に来た際、公会がノートル・ダム大聖堂に赴き、  
人民と一体となって「自由の讃歌」を歌いながら行進することを求めた議員。

37) AP, t. 79, p. 32-33.

38) Albert Mathiez, *La révolution et l'église*, Armand Colin, 1910, p. 112. 以下この文献を MRE  
と略。

が他の議員たちのなかにもおかしくない。いずれにしても国民公会は、非キリスト教化運動に対して態度を決めかねている。

だが数日後には情勢が変わる。11月10日、理性の祭典を報告にきた一団を国民公会が迎える前、シャボ、チュリオ、バジール<sup>39)</sup>は、政府の「恐怖政治」に異議を唱える発言をしていた<sup>40)</sup>。翌日この件に関して、この三人はジャコバン協会にてエベール派から糾弾され、チュリオはジャコバン協会からの追放が、シャボとバジールはその振る舞いの調査が提案される(11月11日)<sup>41)</sup>。さらに、シャボとバジールが東インド会社解散時の隠謀に関わっていたことが判明し、二人は逮捕されることになる(11月17日)<sup>42)</sup>。

このように、国民公会にて非キリスト教化運動を推していた「穏健派」の議員たちが信用を失うなかで、ロベスピエールがジャコバン協会にて非キリスト教化運動の行き過ぎを批判する演説を行なったのである(11月21日)。司祭への俸給廃止の事案は結局、ロベスピエールの演説の翌日(11月22日)、司祭たちに寛容を求めるダントンの演説もあって(「諸君が司祭から生存する手段を奪ったら、飢えて死ぬか、ヴァンデの叛乱に合流するかという残酷な二者択一を諸君は彼らに強いることになる<sup>43)</sup>」)、聖職を放棄した司祭にも「救済金」を与えることで決着し、聖職者民事基本法を廃止するにまではいたらなかった。このように国民公会で潮目が変わったためであろうか、パリでの教会封鎖を布告させたショーメットは11月28日、カトリックのミサを事実上容認する内容の布告を出す<sup>44)</sup>。国民公会では12月6日、信教の自由に反するあらゆる暴力と措置を禁止する法令が採択され、カトリックが教会で礼拝する自由が確認されるとともに、その礼拝を妨げるような行為は禁止さ

39) Claude Basire (1764-1794).

40) AP, t. 78, p. 703-706.

41) Aulard, *La Société des jacobins*, tome V, p. 508. CF, MRE, p. 102-104.

42) Henri Wallon, *Histoire du tribunal révolutionnaire de Paris, tome troisième*, p. 140-141. CF, MER, p. 112-114.

43) AP, t. 79, p. 646.

44) *Le Moniteur*, vol. XVIII, p. 516-517.



れる<sup>45)</sup>。

国民公会はロベスピエールに同調して非キリスト教化運動の行き過ぎに歯止めをかけようとしたかにも見える。ただし12月8日には、教会の封鎖を通達した派遣議員たちの政令が有効であることが、信教の自由の政令の文言を修正することで確認されもする<sup>46)</sup>。またショームットが教会封鎖を撤回することをパリのコミューン評議会に要請した際、「真理、理性、健全な哲学への崇拜だけを認めるためにカトリックの崇拜を放棄したと宣言した諸地区が公共精神に与えた幸福な衝撃を止める<sup>47)</sup>」といった強い反対意見が出されもした<sup>48)</sup>。

## 最高存在への崇拜と道徳

国民公会で信教の自由に反するあらゆる暴力と措置を禁止する法令が採択されたため、非キリスト教化運動の行き過ぎには歯止めがかかったとはいえ、運動は止むことなく各地で続く<sup>49)</sup>。カトリックの礼拝に対する暴力を法令どおりに禁じるように国民公会に陳情しに来る者たちに対して、キリスト教を以前のような支配的な宗教として復活させるわけにはいかないといった意見が出されもする<sup>50)</sup>。各地で行われた理性の祭典のほうはどうかと言えば、理性の崇拜が唱えられるものの、ほとんどの場合、無神論的ではなかった。理性とともに、神ないし最高存在を讃える祭典も多かった<sup>51)</sup>。理性の祭典という名で各地で行われたにせよ、教会でこれまで行わ

45) AP, t. 80, p. 30.

46) AP, t. 81, p. 120-121. ロベスピエールの宗教政策に同調しない動きに関しては、オラル前掲書19章「ロベスピエールの政策にたいする抵抗」を参照されたい。ACR, p. 235-239.

47) *Le Moniteur*, vol. XVIII, p. 517.

48) ACR, p. 226. この時期のショームットの言動に関しては、以下を参照されたい。Nicole Bossut, *Chaumette porte-parole des sans-culottes*, Éditions du CTHS, 1998, p. 348-353.

49) ACR, p. 238. Vovelle, *La Révolution contre l'église. De la raison à l'Être suprême*, op. cit., p. 278, Planche 4.

50) ACR, p. 237-238.

51) 各地での理性の祭典において無神論的傾向が強かったか、それとも理論論的ないし有神論的

れてきたような組織的に統一された崇拜の形式はなかった。逆に言えば、キリスト教の信仰に依拠することなく、かといって完全に無神論的になるわけでもなく、共和国市民としての道徳意識を育むことのできるような崇拜の形式がばらばらに求められていたと考えられる。そのような情勢のなか、1794年4月6日、国民公会にてクートンが「永遠者に捧げる旬日祭の計画」を公安委員会が近いうちに提出すると告知すると拍手喝采され<sup>52)</sup>、5月7日にはロバスピエールが最高存在の祭典を提案することになる。

その際ロバスピエールは、これまで様々な機会に繰り返してきた考え方を纏め上げ次のように説く。

人々を彼らの存在の創造者に結わえ付ける聖なる絆を断ち切らないように諸君は十分に気をつけなさい。こうした信条 [opinion] がひとつの人民において支配的であったということだけで、それを破壊するのが危険であることを十分に裏付けてくれる。諸義務の動機と道徳性の基礎がこうした考えに必然的に結びついてきた以上、それを消し去るのは、人民の道徳心を低下させることになるからだ。同じ原則から言えるのは、根付いた崇拜を攻撃するには、必ず慎重さとある種の繊細さが必要であるということだ。急激で暴力的な変化が、道徳に向けられた攻撃と見なされ、誠実さそのものをなして済ませてもよいのだと見なされてしまわぬように。いずれにせよ、社会生活のしくみのなかで神性にとってかわることができる者は、天才の極みに私の眼には見える。それにとって代わらずに、人々の精神から神性を追い払おうとだけ夢見る者は、愚かさや背徳の極みに私には見える。<sup>53)</sup>

---

傾向が強かったについては、オラルールの調査を参照されたい (ACR, p. 71-159)。

52) *Le Moniteur*, vol. XX, p. 151.

53) « Sur les rapports des idées religieuses et morales avec les principes républicains, et les fêtes nationales », séance de la Convention nationale, 18 floréal an II (7 mai 1794), OCR, t. X, p. 453.

ここでもロベスピエールは、神の崇拜がフランス人民の義務と道徳の基盤になっているという考え方を繰り返している。ではいったいどのような論理によって神の崇拜が人民の道徳意識に結び付くのか。

自然は人間のうちに、快と苦の感覚を据えており、それによって、自分に有害である生理的な事物は避けるように、自分に都合がよい生理的な事物は探すように人間は強いられる。道徳上の事柄にかんして、理性的推論によるぐずぐずとした助けをかりずとも、善をなし、悪を避けるように仕向けるような敏速な本能を人間のうちに創造するならば、社会の傑作となろう。というのも、自分の情念によって道を誤る各人の個々の理性は、しばしば、情念の言い分を弁護する詭弁家にすぎず、人間の権威が人間の利己愛によってつねに攻撃されるからだ。ところで、この貴重な本能を産み出すか、あるいは、それに取ってかわるものとは、人間の権威の不十分さを補うものとは、宗教的な感情であって、この感情を魂のなかに植え付けるのは、人間よりも優れた力によって道徳の諸戒律に承認が与えられるという考え方である。それゆえ、立法者が無神論を国策としようとする例を私は知らない。<sup>54)</sup>

「道徳上の事柄にかんして、理性的推論によるぐずぐずとした助けをかりずとも、善をなし、悪を避けるように仕向けるような敏速な本能を人間のうちに創造するならば、社会の傑作となろう」とロベスピエールは言う。すなわち、人間は快を求め苦を避ける感覚を備えてはいるが、善悪をすぐに見分ける道徳的本能のごときものは欠けていると言いたいのだ。この欠陥を補うためには、理性を当てにすることができない。なぜなら、「自分の情念によって道を誤る各人の個々の理性は、しばしば、情念の言い分を弁護する詭弁家にすぎず、人間の権威が人間の利己愛によってつねに攻撃されるからだ」。すなわち、個々の人間の理性は私的な情念の影響を蒙るので、適切な道徳的判断ができないということだ。それゆえ、個々の人間の道徳的

54) OCR, t. X, p. 452-453.

判断の欠陥を補うためには何かが必要になる。その何か、宗教的感情だとロベスピエールは言うのである。「この貴重な本能を産み出すか、あるいは、それに取ってかわるものとは、人間の権威の不十分さを補うものとは、宗教的な感情であって、この感情を魂のなかに植え付けるのは、人間よりも優れた力によって道德の諸戒律に承認が与えられるという考え方である」。つまりロベスピエールは、フランス人民は現状において理性だけでは適切な道德的判断ができないと見なしており、そうである以上、「人間よりも優れた力によって道德の諸戒律に承認が与えられるという考え方」が必要であり、現にその考え方がフランス人民には支配的であると説いている。「社会生活のしくみのなかで神性にとってかわることができる者」がいまだにいない以上、「人々の精神から神性を追い払おうとだけ夢見る者は、愚かさど背徳の極み」である。だからこそロベスピエールは、人民の道德に承認を与える神という観念が人民の間で支配的である状態を是が非でも維持すべきだと主張するのである。

それでは、ロベスピエールが言う宗教的感情は、当時のフランスにおいてどれだけ支配的であったのか。ここで注意しておきたいのは、宗教的感情の内容である。先に見たように、ロベスピエールが立法議会期（1791年11月29日）に「人民が崇めている宗教上の偏見に真っ向から衝突してはならない<sup>55)</sup>」と述べた時、彼の念頭にあったのは、人民の「宗教上の偏見」に根ざした宗教感情であったと考えられる。その一方で、彼が非キリスト教化運動の行き過ぎを批判した際（1793年11月21日）、「フランス人民は、司祭にも、迷信にも、宗教儀式にも愛着を抱いていない。崇拜そのもの、言い換えるならば、罪にとっては恐怖となり徳にとっては支えとなる理解することのできぬ力という観念にだけ愛着を抱いている<sup>56)</sup>」と述べた時には、人民がカトリックの教義と祭礼に基づく宗教感情をなくしてもなお抱いている宗教感情について語っている。それでは、最高存在の祭典を提案する際に、「人々を彼らの存在の創造者に結わえ付ける聖なる絆を断ち切らないように諸君は十分に気を

55) 既に引用, OCR, t. VIII, p. 26.

56) 既に引用, OCR, t. X, p. 197.

つけなさい。こうした信条 [opinion] がひとつの人民において支配的であったということだけで、それを破壊するのが危険であることを十分に裏付けてくれる<sup>57)</sup>と言う時、彼が維持すべきだと考えた人民の宗教感情とはいかなるものなのか。

この演説においてロベスピエールは無神論を批判する一方で、キリスト教会の影響力を回復させようとしているのではないと強調し、司祭たちを厳しく批判する。

そもそも、司祭たちと神の間にいったいどんなかかわりがあるのか。道德にとつて司祭たちは、医学にとってのいんちき医者のようなものだ。自然の神は司祭たちの神とどれだけ異なることか。司祭たちが拵えた諸宗教のほかは無神論にかくも似ているものを自然の神は何も知らない。最高存在の姿を歪めて、彼らは自分たちが考える限り最高存在を破壊した。彼らはそれを、あるときは火の玉に、あるときは牛に、あるときは木に、あるときは人間に、あるときは王に拵えた。司祭たちは神を彼らに似せて創造した。彼らは神を、嫉妬深く気まぐれ、強欲で残酷、冷酷なものにした。彼らは、かつて王宮の宰相たちがクロヴィスの子孫たちを扱ったように、神の名の下に君臨し、神に取ってかわるために神を扱った。彼らはあたかも王宮のなかに追いやるように神を空に追いやり、地上に呼び出したのはもっぱら10分の1税や富、名誉、快樂、権力を自分たちの利益になるように求める時だけだった。最高存在の真の司祭は自然である。その神殿は宇宙である。その崇拜は徳である。その祭典は、普遍的な友愛の甘美な結び目を引き締めるため、そして感受性豊かで純粋な心に発する讃辞を捧げるために最高存在の眼下に集結した偉大な人民の歡喜である。<sup>58)</sup>

ロベスピエールが維持すべきだと考えた人民の宗教感情は、司祭たちの神にたいするものではなく、「自然の神」にたいする宗教感情である。これまでの発言を列挙して整理するならば、人間の道德に承認を与える、人間よりも優れた力（「人間

57) 既に引用, OCR, t. X, p. 453.

58) OCR, t. X, p. 457.

よりも優れた力によって道德の諸戒律に承認が与えられるという考え方<sup>59)</sup>、「虐げられた無辜には気を配り、勝ち誇る罪は罰する偉大な存在<sup>60)</sup>」、「罪にとっては恐怖となり徳にとっては支えとなる理解することのできぬ力<sup>61)</sup>」への宗教感情、つまり、善悪を最終的に審判する神にたいする宗教感情である。問題は、そうした宗教感情がどれだけフランス人民に支配的であって、どれだけ道德と義務の基盤になっているかだ。そのような宗教感情を基にして道德意識を育てていた人々はいたであろうが、その一方で、司祭たちが説く神への宗教感情を基にして道德意識を育てていた人々もまだまだいたはずだ。そしてさらに、非キリスト教化運動を推し進めた人々のなかには、一切の宗教感情を排して、理性と法によってのみ道德を基礎づけたいと思っていた者がいたはずだ。フランス革命では人権宣言で高らかに唱えられたように、主権は国民にある。主権者であるならば国民は自らの道德を自ら基礎づける権利がある。そんな主権者たる国民は、宗教的な感情に補われることなく、道德的な判断を共有するようになれないのか。

ロベスピエールの演説は、現状の診断をもとにして進むが、ところどころで普遍的な人間論のようなものが組み込まれる。あらためて問題にしたいのはさきに引用した次の箇所だ。

道德上の事柄にかんして、理性的推論によるぐずぐずとした助けをかりずとも、善をなし、悪を避けるように仕向けるような敏速な本能を人間のうちに創造するならば、社会の傑作となろう。というのも、自分の情念によって道を誤る各人の個々の理性は、しばしば、情念の言い分を弁護する詭弁家にすぎず、人間の権威が人間の利己愛によってつねに攻撃されうるからだ。<sup>62)</sup>

---

59) 既に引用, OCR, t. X, p. 453.

60) 既に引用, OCR, t. X, p. 197.

61) 既に引用, OCR, t. X, p. 197.

62) 既に引用, OCR, t. X, p. 452.

はたしてロベスピエールは、各人間の個々の理性はこれまでのところしばしば情念の影響を受けることがあったが、今後もしばしば情念の影響を受け続けることになる、逆に言えば、情念の影響を一切受けることなく道徳的な判断を基礎づけるように個々の理性が成長することはなからうと考えていたのか。個々人の理性の不充分さを公の議論によって克服し、宗教的な感情に拠らずとも適切な道徳的判断を共有する人民が現れることを彼は立法者として期待していなかったのか。

革命が始まって間もない頃、ロベスピエールは、出版の自由を制限する法案に反対する際に、個々人が自由に公表する意見どうしの闘争を通じて「共通の理性」が発揮されると力説していた。

各人の思想がその人の性格と精神の結果であることを、自然そのものが望んでおり、精神と性格のこのような驚嘆すべき多様性を創り出したのは、まさに自然である。したがって、自らの意見を公表する自由は、あらゆる反対意見を公表する自由以外の何ものでもありえない。諸君がこの自由に幅を与えておほか、あるいは、真理がはじめから、各人の頭からまったく純粹に、まったく裸のまま、外に出てくるようにする手段を諸君が見つめるか、そのどちらかであるはずだ。真理が外に出てくることのできるのは、もっぱら、あらゆる真や偽の観念、ばかげた観念や理にかなった観念の間での闘争を通じてでしかない。この混合状態においてこそ、共通の理性〔raison commune〕が、すなわち、人間に与えられた善悪を見分けられる能力が発揮され、一方の観念たちを選び、他方の観念たちを棄却するのだ。こうした能力の行使を諸君の同胞から奪い取り、諸君の特別な權威をそれにとってかえたいと思うのか。しかし、過誤と真理を分かつ境界線を、いかなる手で引こうというのか。もしかりに、法を作る人々や法を適用する人々が人間の知性よりもすぐれた知性の持ち主ならば、思想に対するこのような支配権を行使することができよう。しかし彼らが人間でしかないのなら、ある一人の人間が、ほかのあらゆる人間の理性に対して、いわば至上の権利を持つということがばかげているのなら、意見の表明に対するあら

ゆる刑法は、ばかげた沙汰でしかないことになる。<sup>63)</sup>

当時のロベスピエールは、「人間に与えられた善悪を見分けられる能力が発揮されること」、すなわち、人民の「共通の理性」によって道徳を定めることができると考えていたのである。そのロベスピエールが最高存在の祭典にいたるまでに、自由な討論に対して、フランス人民の、ひいては人間の理性に対してどのように不信感を募らせていったかはここでは詳述しない<sup>64)</sup>。本稿で問題にしたいのは、当面のところ人民の理性によって道徳を基礎づけることができないと見なし、当面のところ支配的な人民の宗教感情と道徳の結びつきを壊さないように配慮したロベスピエールが、最高存在への崇拜を国家宗教として定めようとする際に、それと同時に人民を「再生」させる公教育の一環として祭典を企画していることだ。

なぜ、祭典なのか。

## 最高存在の祭典

演出をまかされたダヴィットの計画によれば、最高存在の祭典では「野心」、「エゴイズム」、「不和」、「偽りの簡素」に支えられた「無神論の怪物」が焼かれ、その残骸のまっただ中に「叡智の女神」が現れることになっている。

彼女を見ると、歓喜と感謝の涙が、あらゆる者の眼から流れだす。〈無神論〉が絶望の淵へ追い込もうとしていた善行の士を彼女が慰める。〈天〉の娘は次のように言っているようにみえる。「人民よ、自然の〈造物主〉を讃えなさい。その不変の摂理を崇敬しなさい。それをあえて侵害しようとする放胆な輩は滅びるがよい。高潔で勇敢なる人民よ、汝を道に迷わせるために用いられる手段

63) « Discours sur la liberté de la presse », OCR, t. VII, p. 323 (le 11 mai 1791 à la société des amis de la Constitution).

64) 拙論「恐怖政治」と最高存在の祭典—ロベスピエールの徳論」外国語外国文化研究 XVII, 2016, p. 144-149を参照されたい。



でもって、汝の偉大さを判断しなさい。偽善者たる汝の敵たちは、汝が理性の法に心から執着しているのを知っており、まさにその点につけ込んで、汝を破滅させようと望んでいたのです。しかし汝は彼らの詐術にもう騙されてはなりません。これらの新手のドルイド僧たちが暴力によって引き立てようとした新たな偶像を汝自ら打ち砕きなさい」。<sup>65)</sup>

理性の祭典とは違って、最高存在の祭典では人民の女神は自由ではなく「叡智 *sagesse*」である。「叡智」が、「自然の〈造物主〉」を讃え、「不変の摂理」を崇敬するように呼びかけ、そして「理性の法に心から執着している」人民の、まさに理性への信頼に訴えて無神論を説こうとする者たちを人民の「敵」と呼び、「敵」に騙されてはならぬと命じることになっている。無神論の怪物の像を焼くこの儀式の後、人々は自由の樹の下に集まり、最高存在に捧げる讃歌を歌いながら、「徳への聖なる愛によって吹き込まれた崇高なる感情を繰り返し表現」し、「すべてのフランス人が友愛の抱擁のなかに自分たちの感情を溶け込ませる」ことになっている<sup>66)</sup>。

当日、祭典の主宰者に選ばれていたロベスピエールは、無神論を焼く儀式の前の演説では、最高存在を讃える文言を連ねるとともに、最高存在の不滅の手が「人間の心のうちに正義と平等の規範を刻みながら<sup>67)</sup>」や、「自由と徳は神の懐から一緒に出てきた<sup>68)</sup>」といった表現を用いながら、神と人間の繋がりについて説き、人民に次のように呼びかける。

高潔な人民よ！汝の敵どもすべてに打ち勝ちたいと望むのか！正義を実践し神にふさわしい唯一の崇拜を神に捧げなさい。人民よ、神の加護の下、純粋な

---

65) *Le Moniteur*, vol. X X, p. 653.

66) *Ibid.*, p. 654.

67) OCR, t. X, p. 481.

68) OCR, t. X, p. 482.

歓喜の興奮のなかに今日身を投じよう。明日はさらに悪徳と暴君どもを打ち負かすことになろう。我々は世界に共和政の徳の模範を示すことになり、それはさらに神の名誉となろう。<sup>69)</sup>

このように、共和国の敵に打ち勝つには、正義と平等の規範、徳と自由といった神から人間に与えられたものによらねばならないと説き、そうである以上、神を崇めるように命じている。また、ダヴィッドの計画で言及されていた「叡智」の重要性を、ロベスピエールは無神論を焼く儀式の後の演説でも強調している。

とりわけ叡智をこそ、我々の罪深き敵たちは共和国から追い払おうと望んでいた。諸国の繁栄を固めるのにふさわしいのは叡智だけだ。それこそが我々の勇気の果実を我々に保証してくれる。それゆえ叡智を我々の企てすべてに結びつけよう。<sup>70)</sup>

このように最高存在の祭典では、人間の精神的働きのなかで重要な役割を演じることが期待されているのは、理性ではなく「叡智」である。「叡智」こそが神によって人間の心に刻まれた道徳を実践させる原動力だと説かれている。しかしながら、神への崇拜と「叡智」の役割を言葉によって説き聴かせる説教風の演説は無神論を焼く儀式の前後で短くなされるだけで、祭典の大部分は集まった人民が讃歌を歌いながら行進することに当てられている。そこにこそ最高存在の祭典の独自性がある。ロベスピエールは祭典を提案する演説のなかで、次のように述べていた。

人々を集めなさい、そうすれば諸君は彼らをより良きものにするだろう。なぜなら、集まった人々は互いに好かれようとするし、そして、自分たちを尊敬すべき者にしてくれる物事によってのみ、彼らは互いを好きになることができ

---

69) OCR, t. X, p. 482.

70) OCR, t. X, p. 482-483.

よう。彼らの集まりにひとつの道徳的で政治的な動機を与えなさい。そうすれば誠実な物事への愛が喜びをともなってすべての心のうちに入ってくるだろう。というのも、喜びがなければ、人々は互いに見つめ合わないからだ。

人間とは自然のなかで最も偉大な事物だ。すべての見世物のなかで最も見事なものとは、偉大な人民が集まった見世物である。ギリシアの国の祭典を語るさいには、熱くならないでは決してられない。しかし、この祭典が目的としていたのは競技でしかなく、そこでは肉体の力、器用さ、せいぜい、詩人や説教師の才能が輝いていた。しかしギリシアがそこに存在していたのである。人々は競技よりも偉大な見世物を目にしていたのであり、それは観客たち自身であったのだ。それはアジアを制覇した人民であったのであり、この人民は共和主義的な徳の数々によって時おり人類の上にまで高められていた。人々が目にしていたのは祖国を救い、その名を高めた偉大な人物たちであった。父たちが子供たちに見せていたのは、ミルティアデス、アリストイデス、エパメイノンダス、ティモレオンであって、彼らがそこにいるだけで、寛大さ、正義、祖国愛の生きた教えになっていた。

フランス人民にとって、その集まりにより広範な目的とより偉大な性格を与えるのは、どれだけ容易いことであろうか。国の祭典の仕組みが十分に理解されたならば、それはこのうえなく甘美な兄弟愛の絆となろうし、このうえなく強力な再生の手段となろう。<sup>71)</sup>

祭典の要となるのは、「再生」という「道徳的で政治的な動機」のもとに集まった市民たちが、お互いを見つめることである。この祭典では舞台上で何か教訓的な見世物が上演されて観客が学ぶのではない。比較されているギリシアの祭典ではその場に立ち会う偉人たちが「寛大さ、正義、祖国愛の生きた教えになっていた」のに対し、企画される祭典での主役は集まった市民たちである。市民たち自身がお互いの姿を見せ合って、お互いを見つめることそれ自体によって「より良きものにな

71) OCR, t. X, p. 458.

る」。フランス人民の「再生」という「道徳的で政治的な動機」に促されれば、市民たちは有徳な人物になるように心を傾けるだろう。市民たちのそれぞれが生まれ変わろうとする姿をお互いに目にすることによって、お互いを好きになれるであろう。そうすれば、徳を高めようとする市民たちは喜びとともに相手を見つめ合って、「甘美な兄弟愛の絆」が生まれるだろう。ロベスピエールは、市民たちがともに再生へと向かう姿を互いに見ることによって、道徳的な快感とでも言えるものが生じることを期待しているのである。

最高存在に相応しい崇拜を捧げるための祭典であるとはいえ、そこで目指されているのは人民の再生である。市民たちはたしかに最高存在へ崇拜を捧げるために集まるにしても、再生を促す契機は市民たちがお互いを見つめ合うことにある。市民たち同士が見つめ合う際に、超越者への宗教的感情がなおも重視されたのだろうか。むしろ、人間たちが集まることで生じる感性的な効果による絆の形成が期待されたのではないか。つまり、広い意味での「芸術」による市民宗教の一形式が祭典において企てられていたのではないか。

## おわりに

祭典後にロベスピエールは次のように嘆いた。

世界で第一級の人民のあのような至高の集会を目にして、地上になおも罪が存在していると誰が信じたか。しかし、あらゆる私的な悪徳が人民の前で消え去るのに、その人民が自分の家庭に帰ると、悪党どもが再び姿を現し、詐欺師の役割が再び始まる。<sup>72)</sup>

「甘美な兄弟愛の絆」は歓喜の興奮のなかで実際に経験されたのだろうが、そのような集団的熱狂の中で生まれた紐帯は市民それぞれが日々の生活に戻ったときに

72) « Contre les factions nouvelles et les députés corrompus », OCR, t. X, p. 561.

持続しなかったのである。

失敗に終わったとはいえ最高存在の祭典の企ては、重要な問題を差し出している。祭典の目的は、キリスト教によって長らく育まれてきた宗教感情に依拠することなく、共和国市民の道徳を基礎づけることにある。はたして、これまで長い間支配的だった「司祭たちの神」への崇拜を否定する有神論的な宗教感情だけで共和国市民の道徳は基礎づけられるのか。有神論的な神への崇拜に依拠して市民の道徳を基礎づけることが当面のところ目指されたにせよ、未来に期待されていたのは、いかなる宗教的感情に依拠することなく、法と理性だけが道徳の基盤となることだったろう。はたして、善悪を最終的に審判する神という観念をまったく無神論によって捨て去り、人間の理性と法にだけ依拠した制度によって裁きを行おうとした場合、市民の道徳は充分に基礎づけられるのか。

このような問題が出てきた過渡的な時期に、祭典という「芸術」に人々の紐帯形成が求められた。はたして「芸術」はそのような役割を担うことができるのか。担うことができるとしたら、担はねばならないのか。たしかに近代において、芸術に社会的紐帯の形成が求められることは稀であり、むしろ個人々の美的判断によって芸術的価値が測られることが多い。しかしながら、個人々の趣味を満足させるだけでなく、個人々人を私的な愛好家同士で結びつけるだけでなく、もっと広範に「民族」や「国民」の根本的な気分を方向づける役割が芸術に求められることもある。たしかに、国民の紐帯形成を目的とした国家規模での祭典や芸術作品の製作は全体主義的と言われる国家の例しか目立たない。ただ、民主主義的と言われる国家においても、スポーツや文化や科学の祭典などが、非政治的な目標を持つとされながらも何らかの紐帯を求めて実施され、熱狂的に迎え入れられることもある。かつて社会の紐帯を形成する役割を担っていた宗教が後退していくなかで、いったい人々は何を基にして結びつけばいいのか。宗教に拠らず、芸術に拠らず、人々が法と理性だけで結びつこうとしたら、いかなる共同体が生じ、いかなる道徳性が育まれるのか。宗教や芸術に依拠する共同体の危険性を認識しながらも、この問題を考える必要がある。